

製品名: Plk1 (リン酸化 Ser137) ウサギポリクローナル抗体**カタログ番号: APRab05292**

研究使用のみ

概要

説明	ウサギポリクローナル抗体
宿主	うさぎ
応用	WB,IHC,ICC/IF,ELISA
反応性	ヒト、マウス、ラット
標識	非共役
修飾	リン酸化
アイソタイプ	IgG
クローン性	ポリクローナル
形態	液体
濃度	1mg/ml
保存	アリコートし、-20°Cで保存してください（12 ヶ月有効）。凍結/融解サイクルを避けてください。
輸送	氷袋
バッファー	50% グリセロール、0.5% 保護タンパク質、0.02% 新タイプ防腐剤 N を含む PBS 液。
精製	アフィニティー精製

応用

希釈倍率	WB 1:500-1:2000,IHC 1:50-1:200,ICC/IF 1:50-1:200,ELISA 1:2000-1:20000
分子量	68kDa

抗原情報

遺伝子名	PLK1
別名	PLK1; PLK; Serine/threonine-protein kinase PLK1; Polo-like kinase 1; PLK-1; Serine/threonine-protein kinase 13; STPK13
遺伝子 ID	5347.0
SwissProt ID	P53350
免疫原	抗血清は、Ser137 のリン酸化部位周辺のヒト PLK1 由来の合成ペプチドに対して作製された。アミノ酸範囲: 103-152

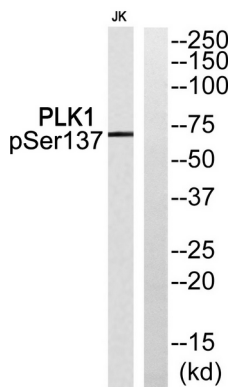
背景

この遺伝子によってコードされるセリン/スレオニンプロテインキナーゼは、CDC5/Polo サブファミリーに属します。有糸分裂期に高発現し、多くの種類の癌において高レベルであることが認められています。癌細胞におけるこのタンパク質の枯渇は、細胞増殖を劇的に抑制し、アポトーシスを誘導することから、癌治療の標的となっています。 [RefSeq 提供、2015年9月],触媒活性: ATP + タンパク質 = ADP + リン酸化タンパク質。発生段階: G2期およびM期に最大限に蓄積し、有糸分裂後およびG1期を通してほぼ検出できないレベルまで減少し、その後S期に再び蓄積し始める。酵素調節: セリンおよびスレオニンのリン酸化によって活性化される。機能: 細胞周期のM期を通して、中心体の成熟および紡錘体の組み立ての調節、染色体腕からのコヒーシンの除去、APC/C阻害因子の不活性化、有糸分裂からの離脱および細胞質分裂の調節など、いくつかの重要な機能を実行するセリン/スレオニンタンパク質キナーゼ。誘導: 成長刺激剤による。PTM: M期におけるPLK1の活性化中、Ser-137の自己リン酸化およびリン酸化は重要なイベントではない。相: PTM:Thr-210および/またはSer-137のリン酸化によって触媒活性が増強される。類似性:タンパク質キナーゼスーパーファミリーに属する。類似性:タンパク質キナーゼスーパーファミリーに属する。Ser/Thrタンパク質キナーゼファミリー。CDC5/Poloサブファミリー。類似性:1つのタンパク質キナーゼドメインを含む。類似性:2つのPOLOボックスドメインを含む。サブユニット:CEP170およびEVI5と相互作用する。ERCC6Lと相互作用し、リン酸化を行う。FAM29Aと相互作用する。組織特異性:胎盤および結腸。

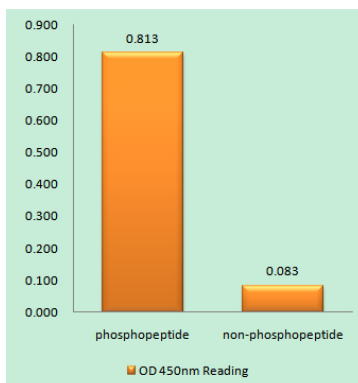
研究分野

Cell_Cycle_G1S;Cell_Cycle_G2M_DNA;卵母細胞減数分裂;プロゲステロンによる卵母細胞成熟;

画像データ



PLK1 (リン酸化 Ser137) 抗体のウェスタンブロット解析。右レーンには PLK1 (リン酸化 Ser137) ペプチドでブロッキングされている。



PLK1 (リン酸化 Ser137) 抗体を用いたリン酸化ペプチド (リン酸化左) および非リン酸化ペプチド (リン酸化右) 免疫原の酵素結合免疫吸着測定 (リン酸化 ELISA)